

『戦争の話 日露戦争』

ロシアのウクライナ侵攻を見て、あらためて戦争の恐ろしさを感じました。ちょうどテレビでアウシュビッツの番組をやっていました。人は何年たっても、また大きな失敗をしても正しい行いを学ぶことができません。どんな言い訳を付けるにしても、人が住んでいる領土を侵し、自分の領土にしてしまうことは武力による侵略と思います。

博物館や歴史民俗資料館に行くと、戦前の配給切符や家庭燃料購入通帳などが残っています。千人針や寄せ書きを書き込んだ日章旗なども見ることがあります。（結構血にまみれた日章旗です）金属を回収するため、様々な家庭用品やマンホール、ベンチ、鉄柵、ミシンそしてお寺の鐘や胸像（銅像）なども集められました。天王川公園にあった片岡春吉の銅像や西小にあった杉山代次郎先生の胸像もなくなりました。（現在の像は戦後のものです）この他、兵隊さんがもっていたヘルメットやサーベル、飯盒、手榴弾や銃剣なども展示されています。両親に宛てた手紙や遺書は涙なしで読むことはできません。津島神社と神守の一里塚には忠魂碑があり、市内で亡くなった 800 人の英霊が祀られています。忠魂碑には日清戦争や日露戦争から太平洋戦争までに亡くなった方たちが祀られています。またお寺の墓地などに行くと戦争で亡くなった方の顕彰碑があり、亡くなった方の経歴や功勞を知ることができます。

このような身近な戦争遺跡や遺物をぜひ訪ねてほしいと思います。

テレビで『坂の上の雲』という歴史ドラマを見ました。司馬遼太郎氏の原作です。日露戦争で活躍した秋山好古、真之兄弟と正岡子規の 3 人を中心に明治という時代がどんな時代であったか考えさせられるストーリーです。長編小説で読むのは手ごわいところがあります。テレビを見て思ったのは、日露戦争が一方的な日本の勝利ではなく（結果としては一方的で日本の強さが目立つのですが）、きわめて僅差の勝利を勝ち取った戦いであったことがわかりました。政治家や軍人がどのタイミングで戦争を終結させるかを必死に考えていたことに感銘させられました。ウクライナの侵攻にもそんな見通しがあるのでしょうか。

令和 7 年 3 月 5 日

津島市教育委員会

教育長 浅井厚視